『入試必携 英作文』を用いた3年間の実践

―協働学習を通して批判的思考力と自己添削力を養う―

戸田 行彦

1. はじめに(実践の動機)

英作文の授業と聞いて、先生方はどのようなイメ ージを抱いておられるだろうか、課題文を生徒に指 名し、生徒が板書した英文を見て、教師がその場で 添削し解説する授業だろうか、それとも、事前に何 らかの形で提出させた英文を添削し解説する授業だ ろうか、筆者もそのような指導をしたことがあるが、 指導者の添削力が向上したが、生徒の添削力は向上 しなかった. またペアワーク等を通し. 互いの答え を確認させたりしたが、正答につながる程、機能し なかった. さらには、黒板で添削された他者の英文 や配布された模範解答を鵜吞みにし、自分で考えた 英文と異なる場合には、部分点等あるにも関わらず、 自分のノートに×をしていた生徒たちをこれまで何 人も見てきた. そこで. 筆者は高校3年生の英語表 現Ⅱの授業における英作文指導で、協働学習を通し て、生徒の批判的思考力と自己添削力を養うには、 どうすれば良いのか考えることになった.

2. 大切にしたこと(実践のデザイン)

大学入試を控えた高校3年生たちであるため、活動を通して付けたい上述の2つの力を丁寧に説明し、以下の手順で授業を設計した.

- ①生徒たちに板書させる前に、 $3 \sim 4$ 人のグループを作り、よりよい英作文にするための話し合いの時間を作り、代表者が板書する.
- ②板書後、グループの生徒たちに役割を与えて、 板書された複数の英作文を見て、批判的に考え させる活動(他のグループの英作文を見て、鵜 吞みにせず間違いの指摘等)に取り組む.
- ③批判的に考えさせる活動の後,別解の紹介の時間(私はこの表現を使った等)を作り、共有する.

初年度のアンケートをもとに、年々改良をし続けた3年間の取り組みを報告する.

3. 新学習指導要領を見据えて(実践との整合性)

高等学校では、2022 年度より新学習指導要領が 導入された。筆者が担当した3年間は旧課程ではあ るが、新課程のことを見据えた上での取り組みであ ることは言うまでもない。確認であるが、新しい時 代に必要となる資質・能力の育成として。

- ①何ができるようになるか
- ②何を学ぶか
- ③どのように学ぶか

がある. また学習評価の充実として,

- ①学びに向かう人間性の涵養
- ②知識・技能の習得
- ③思考・判断・表現力の育成

と3つの観点がある.「主体的で対話的で深い学び」の実現に受けて,「アクティブラーニングの視点から不断の授業改善」が求められている点について,授業者として常に心にとどめておかねばならないと考え. 10. で後述する振り返りシートの導入をした.

4. 目指す生徒の姿(実践を通して)

英語科教員として、生徒たちの骨太の英語力の育成を目標にしている。本校では多くの生徒が大学進学を目指すため、高3生になると、受験対策授業を行うことが期待される。言い換えれば、「受験英語」と「コミュニケーション能力の育成」の両立が求められている。しかし、大学入試だけを目標とするのではなく、入試を1つの通過点として、卒業後を見据えた学び続ける姿勢(探究心)を育てることを大切にすることが必要である。VUCA時代だからこそ、協働学習を通し、自分とは異なる考え方に出合った時、他者の考えを尊重し、他者と言葉のやりとりを通して互いに信頼関係を構築できるようになるのが、目指す生徒の姿である。

5. 協働学習にむけて役割分担(実践の詳細)

2. で述べたデザインの詳細を説明する. 和文英 訳の問題については、毎回異なる4人グループを作成した後、以下のように役割分担を発表した. 3人 の場合は、☆の役割を削除することにした. なお、 丸番号は2. と対応している. それぞれの役割分担があってこそ、成立する学習活動であり、生徒たちには、4. で述べた目指す姿を共有した上で、協力し、互いに高め合えるようになることができれば、一人ひとりの批判的思考力のみならず、それぞれの自己添削力の向上も期待できると伝えた.

① Writer(s)

自グループの英文を白色のチョークで板書する.

② Critical Thinker(s)

他グループの英文を<u>黄色</u>のチョークで指摘する. 指摘方法は以下の**3**種類である.

- (A) 誤っている箇所に下線を引き、その下に訂正した表現を板書する.
- (B) 下線だけを引く.
- (C) 正解だと思えば丸をする.
- 3 Additional Writer(s)

チーム内に存在する別解を<u>オレンジ色</u>のチョークで板書する. 単語単位でも可とする.

☆ Supporter(s)

グループ内の様子を見て、サポートに徹する.

②の Critical Thinker(s) について補足する. 2. でも述べたが、板書された英文を鵜吞みにしないこ とが重要であり、しっかり自分の頭で考え、グルー プのメンバーと相談し合う活動を通して, 批判的思 考力を養おうとした試みである. (A)のように明らか な誤りには指摘できても、 時には自信のないケース もありうる. 何か違和感があるのだが、どう直せば よいのかわからない時は、(B)のようにさせてきた. もちろん、授業のルールとして、考えたことが大事 で、指摘は間違っても良いということを伝えてきた. また、「授業の最後に、書いた文はしっかり解説(フ ォロー)するよしと伝えた年は、何かしら書く生徒 たちが多くなったように思われる. はじめは周囲に 遠慮していたのか。(B)のケースが目立ったが、徐々 に(A)のケースが増えていった. 逆に(C)はめったにな かった. このように、目的別に色を分けさせ板書さ せることで、学びの可視化を図ることができた.

6. 研究授業の実施(課題を把握)

初年度に行った研究授業では、このスタイルの授業を提案する気持ちで行った。担当クラスは 30 名の理系クラスで、校内外の先生方に見ていただき、建設的な意見をいただいた。実践の流れはこれまで述べてきた通りだが、読者のみなさんも気になっておられるであろう、協働学習の後の活動について紹介する。

研究授業では、協働学習の後、板書された英文は一人ひとりのノートの英作文とは違うと考え、一切コメントをせず、一人ひとりが宿題で取り組んできた作文の質問タイムにした。しかしながら、研究協議を経て、次の授業からいわゆる、グローバルエラーについては、個別対応では時間がかかりすぎるゆえ、コメントするように変更した。もちろん、その後に、一人ひとりの作文の質問タイムは継続した、無論、板書された別解についてもコメントしなかった。どのようなコメントをすればよいのかという新しい課題が見つかった。

7. アンケート調査と結果(実践の生徒評価)

これまで紹介してきた授業に関して、初年度担当 したクラス 59 名対象にアンケートを行った.「楽し める」、「役に立つ」について、以下の 6 スケールで 調査した. 結果は以下の通りである.

- 1 ぜんぜん当てはまらない
- 2 ほとんど当てはまらない
- 3 あまり当てはまらない
- 4 少し当てはまる
- 5 わりと当てはまる
- 6 たいへん当てはまる

【項目】	楽しめる	役に立つ
①チームで英作検討	5.2	5.4
②クリティカルタイム	5.1	5.4
③別解紹介タイム	4.9	5.3
④教師の解説	4.6	5.4
⑤振り返りシート	3.8	4.4

⑤を除く他の項目については、生徒たちが楽しみつつ、役に立つと感じていることがわかった。

8. 課題解決に向けて(2年目の実践)

2年目は、初年度の課題解決に向けて、<u>グローバルエラーのみならず</u>、細部や別解についても、黒板に書いてある英文には丁寧にコメントすることにした。そうすることで、生徒たちも安心して、授業の活動に取り組めると考えたからである。『入試必携英作文』に取り組んでいると、多くの生徒が誤る問題がある。4人グループ、また他のグループからの指摘で間違いに気づくことができたらよいのであるが、それでも気づかないことがあり、どのようにすれば、自分たちでその誤りに気がつくのかという課題に遭遇した、それが2年目の課題であった。

9. 現在のデザイン(3年目の実践)

3年目は、2年目の課題解決を図った。筆者は初年度から一貫して生徒たちに気づかせる指導を心がけてきた。その理由は、「人から聞いたことは忘れるかもしれないが、自分で調べたこと、気づいたこと、見つけたものは忘れることなく、知識の習得につながる」と考えているからである。

そこで、考案したのが、黒板を見て、②の Critical Thinker(s) の出番中に、ヒント無しの時間帯とヒント有りの時間帯を設け、生徒たちに気づかせるきっかけとなるようにヒントを投げかけるようにしたことである。ヒント無しの時間帯は、生徒たち全員が教室の黒板の前に集まり、グループで意見交換をしている場面である。ヒント有りの時間帯は、同様に前方に集まった状態で、教師からヒントを聞き、気づいた生徒が即座に板書しにいくといったいわゆる早押しクイズ的な要素を取り入れた。気づいた瞬間の生徒の顔を見逃さず、さっと板書するように導く、その板書を見た生徒がまたハッと気づく、そのような場面を幾度と設けたことで、生徒たちは知的好奇心をくすぐられたのか、楽しく取り組んでいたように感じている。

この実践の見方を変えると、筆者が主顧問である バレーボールのセッターの役割を、教師が演じてい ると考えることができる。極端な例かもしれないが、 セッターからのトスをスパイカーがアタックするよ うに、教師からのヒントがクイズになり、生徒が誤 りに気付き、正答に導けるような流れをつくり、2 年目の課題解決に至ることができた。

10. 振り返りについて(学んだことをつなげる)

授業の終わりに5分程度時間を取り、生徒に以下の3点について振り返りをさせた.

- ①今日学んだことをまとめよう.
- ②他教科とつながったことを書いてみよう.
- ③気になったことを書いてみよう.

上記の3点に絞って振り返りを促した理由につい て説明する. ①はメタ認知力を高めることを目的に した。②は英語の授業そのものが、他教科と連動し ていることがよくあるからである. 英作文にする日 本語の文章には、他教科に関連する内容が多くみら れる. その文章の背景を知ることで、出題者の意図 をよりくみ取ることができ、よりよい英作文につな げることができるのではないかと考えた. ③につい ては、4. で述べたように、生徒には探究心を持ち 続けてほしい、どんな小さなことでも疑問を持って ほしいといった筆者の願いからスタートした. 実際. 英作文に関することを書く生徒もいれば、内容につ いて気になったことを書く生徒もいた. コメント詳 細内容については、多岐にわたるため紙面の都合上、 割愛するが、3年目の最後には、英作文の授業は探 究の時間のようだと述べた生徒もいた. その発言の 背景には、日本語を英語に訳す過程で、和文和訳を 経るが、出題文の和文を深く考え、どの英語表現が 適切であるのか、その生徒は日々探究していたのか もしれない. 以下, 最後の授業で生徒たちに, 英語 表現Ⅱの授業で、「学んだことは何か」に自由記述 させた. 一部ではあるが、紹介する.

- ・筆者の立場や状況を読み取り、表現する重要性.
- ・英作文の授業で環境問題に関すること.
- ・他者と意見を交わし様々な点で物事を見ること.
- ・色々なつながりを大切にすること.
- ・文に出てくる人や物を掘り下げていくこと.
- ・メタ認知というもの。
- ・話し合った物事を進めることの大切さ.
- ・頭を柔らかくすること.
- ・自分と違う考え方に出合ったこと.
- ・文章からいろんなことを連想して深く考える癖.
- ・英作を人に伝えるように書くこと.
- ・英作文の課題文の場面を考える習慣.
- ・クリティカルシンキング.

11. Further Exercise について(仲間が必要)

二次試験で出題される自由英作文の対策として、『入試必携 英作文』 に登場する Further Exercise においても協働して取り組んできた方法を紹介する. グラフの読み取りや賛否の意見陳述問題等,多岐にわたるが、本当に自由に書いてよいというわけではないと筆者は考えている. 本格的な自由英作文の個別添削指導を行うのは3学期だが、1・2学期の普段の授業においても、これまで述べてきた力の育成に向けて、以下の手順で指導をしてきた.

【予習】

個人で考えて英作文をノートに書く.

【授業】

- ①(是非論題なら肯定側と否定側に分かれる.)
- ②(賛否なら各サイドで) 4 人グループを作る.
- ③英作文をグループ間で評価する.
- ④ワールドカフェ形式で他の意見を入手する.
- ⑤自分のグループに戻り、得た情報を伝える.
- ⑥生徒とのやり取りを通した論点整理をする.
- ⑦振り返りシートに今日の学びを記入する.

【復習】

書き直しをする. 賛否問題であれば, 予習とは 反対側について譲歩を用いて書くことを勧めた.

③の評価については、教師用『詳解』に記載のあるポイントを ABC に分け、評価シートにして配布し、生徒たちに他者評価させた。主張・理由・具体例といった構成面を問う回、譲歩と打消し・時制・一般論の you といった表現面を問う回、さらにテーマに沿った内容か、説得されたか等の内容面を問う回としてそれぞれ目的に応じて実施した。生徒たちはグループ内で輪読をするため、1時間に最低3人分の自由英作文を読むことになる。上述の評価をするため、批判的に英作文を見る機会が与えられる。さらに、輪読した英文から一人ひとりの見識も広まり、自己添削力への転移も期待した。

④のワールドカフェ形式とは、各グループに最低2名は残り、残る2名が教室内を自由に歩き回り、他のグループのところへ行き、アイディアを共有する活動のことである。このやり取り中、生徒たちは、書かれた英文を見て、理解できない箇所について日本語で補足説明を受けていた。

12. まとめ(大事なのは筆者とのやりとり)

3年間の実践を通して、英作文は形や意味だけで はなく. 使用場面を意識した表現が大事であると伝 えてきた. 問題文がどのような場面で、いったい誰 に向かって発した言葉なのか. しっかり英文から状 況を読み取るように伝えてきた. Exercises Bのよ うに、状況例があると大変助かるが、そのようなヒ ントは入試等ではないかもしれない。 生徒によって 解釈の違いがあるのは当然で、その違いを知り、ま た理解するため、授業中に生徒間でコミュニケーシ ョンをとる場面を多く設定してきた. 教師による語 法の解説や添削指導も大事ではあるが それに終始 することなく, 文字にされた言葉には必ず発信者の 意図があると考えられるため、英語表現Ⅱの授業に おいては、英作文の筆者とのやりとり、生徒間のや りとり、教師とのやりとりが必要なコミュニケーシ ョンであると筆者は考えた. 勿論, 添削指導には 1:1が原則であるが、クラスサイズは約20名を 超えることもある. そのような環境で「主体的で対 話的で深い学び」を保証するには、生徒たちが「ド キドキ・ワクワク | する場面を英作文の授業で作る ことにあると考えた. 生徒たちの学びの変革に向け. 脳内をアクティブにするには、家や塾ではできず、 授業でしかできないことをするという結論に至った. 最後に、この実践を3年間も続けられたのは、取り 組み方法に持続可能性があったからだと考えられる. 『入試必携 英作文』の編集時にモニターとしてのお 手伝いをさせていただいたことで筆者自身、英作文 がまるで探究活動のように見えてきた、来年度も. さらなるやりとりを通して、生徒たちが英作文の探 究や英語での発信を楽しみ、卒業後、自立的な学習 者になって世界に羽ばたいていってくれることを期 待している.

参考文献

文部科学省(2015). 教育課程企画特別部会論点整理 補足資料(1).

田村学(2020). 探究的な学習の質を高める「協働的な学び」令和2年10月23日教育課程部会資料2.

(滋賀県立守山中学校・高等学校 教諭)